わが国の現職体育教師教育に向けたアクション・リサーチ型研修プログラムの開発
（平成24年度～26年度　科学研究費助成事業（基盤研究（B））課題番号24300214）研究報告

授業づくりシンポジウム2013
「体育科･保健体育科におけるよい授業を考える」

佐藤　豊*，石川泰成**，大友　智***，下野六太****

【要旨】

平成20年，21年学習指導要領の改訂から５年が過ぎ，国立教育政策研究所は，「21世紀型能力」というキーワードを用いて今後の日本の育てるべき学力について報告書を示した。

次の学習指導要領の改訂に向け改訂スケジュールの見通しが報道されるなど，次第に論議が始まりつつある。今回の改訂の焦点である「思考力・判断力・表現力等」の育成に向けた言語活動の充実といった論議は，PISA 型学力テストや OECD の De-Se-Co のキー・コンピテンシーなどにみられるように，21世紀の教育が教育成果主義（アウトカム・ベース）からのカリキュラムの再編成に向かいつつある潮流の影響を受けたものとも考えられる。

こうした動向を勘案したうえで，保健体育科における「よい授業とは何か」というテーマは，単に指導方法や具体的な教材開発に限定したものではなく，その教育成果としての「生きる力」という教育全体に資することも求められているといえよう。

本シンポジウムでは，体育科・保健体育科における「よい授業」に向けて，平成23年～25年に開催した授業づくりシンポジウムにおける登壇者の提案を概観しつつ，石川氏（国立教育政策研究所）は教育行政の視点から研究指定校事業にみられる具体的研究成果や全国体力・運動能力実施状況調査等の分析結果を踏まえた提案を，大友氏（立命館大学）からは，体育科教育研究者の視点から社会の要請と体育科教育の在り方についての提案を，下野氏（春日市立春日南中学校）からは，教育実践者の視点から授業および学校教育活動全体を通した実践に基づく実生活に生かす教育の提案を，それぞれいただき，シンポジウム参加者との意見交換を行った。

本シンポジウムを通して，バックワード・デザイン（逆向き設計）といった思想を踏まえつつ，体育の授業においては，技能のみならず，態度や知識，思考・判断といった学習内容をバランスよく，かつ発達段階に応じて育成することで，「する」「見る」「支える」というスポーツを多様に楽しめる国民の育成に向けて資する授業づくりが求められていることが確認された。

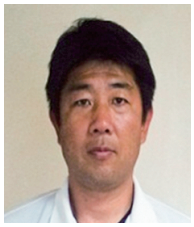
日時　平成26年３月８日（土）
場所　国立大学法人鹿児島大学
　　郡元キャンパス
　　教育学部第一講義棟101教室

【シンポジスト】

石川泰成
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部　教育課程調査官
（併任）文部科学省スポーツ・青少年局体育参事官付　教科調査官

*　鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系　教授
**　国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部　教育課程調査官
***　立命館大学スポーツ健康科学部教授　教職教育総合センター副センター長
****福岡県春日南中学校　主幹教諭

大友　智
立命館大学スポーツ健康科学部
教授
教職教育総合センター副センター長



下野六太
福岡県春日南中学校　主幹教諭
（所属学会等）日本スポーツ教育学会

【コーディネーター】

佐藤　豊
鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系教授

１．シンポジウムの視点

佐藤　豊（鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系）

●はじめに

「よい授業とは何か」ということを考えるに当たって，ここ過去２年間，この保健体育授業づくりシンポジウムにおける各シンポジストの提言を振り返り，参考にしたい。また，現在，中央教育審議会で審議中されている，今後の子ども達に育てるべき資質や能力，いわゆる「21世紀型資質・能力」について共通理解を図りたい。

世界の教育動向とて，PISA 型学力，De-Se-Co のキー・コンピテンシーなどの次世代型の教育の目標が論議されている。

日本もその流れの中にあり，「よい授業」とは，体育だけに特化したものではなく，「生きる力」という教育全体の中で語られるべきものであるという課題感がある。体育でも育てられるものと，体育固有で大切にすべきことの両面から，「良い授業」を検討することが，将来の体育科教育に重要であるという課題意識から，論議を深めていきたい。

シンポジストは，行政，大学，実践の視点から提案を頂き，校種を越えた，あるいは業種を越えた中で，体育の方向性について参加者間で共有を図ることがこのシンポジウムの目的である。

●21世紀における資質・能力

国立教育政策研究所の報告書で，「社会に対する資質・能力，教育課程編成の基本原理」が示されている。世界の資質・能力の整理として，DeSeCo，EU，イギリス，ニュージーランド，アメリカなどのレポートを分析し，基本的リテラシー，認知スキル，社会スキルと三重構造で多くの国は捉えているのではないかという分析をしている。日本における「21世紀型能力」という提案では，「基礎力」，「思考力」，「実践力」と定義し，中教審のこれまでの論議に当てはめて推察すると，「習得・活用・探究」という考え方の具体化とも読み取れる。

私の私見でいえば，教科では，「基礎力」と「思考力」を育て教科外活動（運動部活動や体力向上）では，「実践力」を育成する。「実践力」というのは，「自立的活動力」とか，「人間関係形成力」とか，「社会参画力」などの，体育の指導内容である態度の「責任」が発展していくイメージでとらえると良いかと思う。

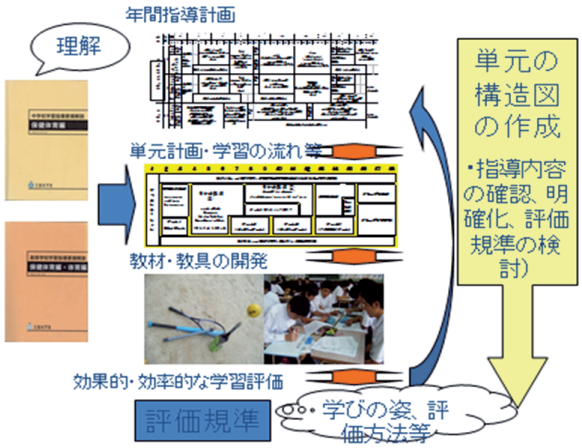
更に，例えば近隣の韓国の体育で言えば，どういうシフトをしたかというと，2007年と2011年の韓国の学習指導要領の変化でいえば，KNPEC（韓国の学習指導要領）では，それまでの指導内容は，運動種目ベース（Gymnastics，Field and Track，Swimming）であったが，2007年改訂からは，体育の価値をベースに指導すべき内容と捉え，Healthy Activity，Challenge Activity，Competitive Activity，Express Activity，Leisure Activity のように体育で育てるべき目的が指導内容として記載され，それらを実現するためのの下位教材群のまとまりが，運動種目という位置づけに変化している。種目を教えるのではなく，種目を通して何を

教えるのかを全面にした改訂といえると思う。その流れは，韓国からは今，イギリスやアメリカに留学した経験者がオピニオンリーダーになっており，欧米型のカリキュラムの影響を受け，種目主義からの離脱を図っているというのが韓国の今といえる。私の提案としては，日本追随すべきというのではなくて，日本は日本で今の形をさまざまな視点から論議したうえで，質保障のシステムができているので，その辺のところは十分論議しないと，世界はこういう流れだから日本も・・という，単純な流れではないという話題提供でもある。運動種目を教えることが指導内容ではなく，その種目を通して何を教えるのか，保証するのかという流れは，世界共通となりつつあるという事の確認が出来ればと思う。

●良い授業の論議に当たっての視点の確認

これから「よい授業」を論議するにあたっての視点提供をしたい。

① 学習指導要領及び解説の視点



体育の目標は，現在の教育の動向と一致しているのか，指導内容が（1)技能，(2)態度，(3)知識，思考・判断として示されていることが適切か，内容の取扱いは適切かという基準に関わることから，それらの適切な理解や咀嚼する側の理解度や解釈力が問われる。

自分の経験から学習指導要領の例示などを解釈する際に，競技の専門の先生の視点ですごく高く，難しいイメージで例示を解釈するケースがある。学習指導要領の解釈がよい授業か否かの判断に影響を及ぼすと言える。

② 年間指導計画の視点

その日の授業の展開を考えるためには，８時間とか16時間といったユニットの中のまとまりで何を保障するのかという視点が大事だと思うが，それらのユニットは，年間指導計画上全体の設計の中でバランスよく時間配当されているのか，１年間の育成プロセスのどの段階なのか，各学校の就学期間を見通した複数年を見通した年間指導計画が十分に検討されているのか，さらには小中高12年間でどう育てていきたいかという展望のなかで考えられているのか，という視点がある。

③ 指導と評価の計画の視点

その１時間でよい，悪いを論じることは，教育学部の学生の指導ならば教授行為のうまいヘタで論議出来るが，授業はそんなに単純ではない。単元の中で，何を指導し，伝えようとしているのか，一時間の授業では，その断面を私たちは見ているにすぎない。良い授業かどうかを見極めようとすると，いつ，どのタイミングで技能の内容を重点化するのか，態度の内容を重点化するのか，どの時点で知識をしっかりと押さえておくのか，といったことが学習過程構造の中にしっかりと計画的に位置づけられていることが大切ではないかという視点がある。

④ 教材，教具の視点

教材にはすごく子供が飛びついて，おもしろそうなのがよい教材かというと，そうではなくて，「教材に振り回されない教材の開発」も大切である。何のためにその教材があるのかという位置づけ，子供たちが，わっと盛り上がっている状況のみがよい教材というわけではないと思う。しっかりと学びを保証しているもの，それがねらいと一致していなければ，ただの遊び道具になってしまう。

⑤ 評価規準の設定とみとりの視点

良い授業を検証するには，学習指導要領から学習評価までの一連のプロセスをそれぞれをチェッ

クし，修正することが良い授業づくりの条件として挙げられる。指導と評価の一体化というのは表裏であり，評価規準に出てくる目標と，もともとゴールにセットしようとしていた内容とが一致しているかどうかということが非常に重要な要素となってくる。すると，どこを取ってよい授業かというのは，すごく多様な見方があるよということ，ここを共有していた方がよい。ゴールへ向けての方法論は一つではないということ。いいアクセス方法を，対象によって，集団の熟成度によって多様に変わってくるので，幅をもって先生方の話を受け止めていけたらと思う。

２．行政からみたよい体育授業

石川泰成（国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部）　教育課程調査官

●国立教育政策研究所指定校の実践を例に

本時は，「ゴール前の空いている場所へ走り込み，仲間と連携して得点するゲームに向けた自分の課題をみつけよう」をねらいとしている。

課題を見付けるということが，何に対する課題か，ということが提示されないままに，授業が行われていることがある。この学習のねらいは何か，そこに共通性がなければ教えることがはっきりしてこないということになる。そうした授業では，「私の課題は，頑張るです。」といった課題が生徒から出てきてしまう。そのため，この事例のようにゲーム像の明確化が重要である。（下線は説明用に引いたもの）

指導案で示された４番目の活動は，「ゲームを観察し，学習カードの観点に沿って仲間の動きを記録し合う」である。ここでのねらいは，「自己の課題を見付ける」ことにあり，この四番目の学習活動で重要なのは，ゲームをやっているその子たちだけでなくて，記録を付けている子たちの活動が非常に重要だということであり，指導上の留意点なども，観察している子どもがどういう風に観察し，どんなことが書けるように支援していくのか，そういう視点で指導案が充実してくると，さらに良いのではないかと思う。５番目の活動は，この１単位時間の中で最も重要な場面である。ゲームでの動きの状況，学習カードに記録をしてもらったその情報である。それと仲間との意見交換から各自の課題を見付ける。受け取って，「あっ，こういう状況だったのね，もう少しこの辺教えてくれる？」ということをお互いが意見交換をしていると，「なるほど自分はそういう状況なのか」というようなこと，あるいは自分自身のプレーの実感だとかそういうものを基にして，自分の課題って何なのかなということを考える。この時間のねらいは自己の課題を見付けることなので，ここのところが主たる活動ということになる。そういうことが指導案から可視化されることが重要だと思っている。記録の状況，意見交換による情報を分析し，自分の課題を見付けるということである。

６番目の活動は，「各自の課題を踏まえ，仲間と連携した動きで得点するための練習を行う」とあるが，本時でいえば，あまり重要ではない場面である。

よく現場の先生方などは，「そんな書いている時間がもったいない，どんどん運動させた方が子どもたちは体力がつく。」という発言をされることもあるが，この活動をしたことによって，子どもたちが次への運動を意欲を持ってやりだすということの方が重要なのではないか。思考する，判断する，自分で決める，自分たちで考えてやってみる，結論を出したことを責任を持ってやる，そういうことに繋がるように思う。物理的に時間を与えて運動させるよりは，運動の質が重要であり，取り組み方が全然変わってくる。そういう意味で，こうした思考・判断の時間を確実に確保するということは重要ではないか。

8　本時の学習と指導（6／10時）

(1) ねらい

○自己の課題を見付けることができるようにする。　【知識，思考・判断】

(2) 準備

バスケットボール，簡易ゴール，ゼッケン，作戦板，マグネット，学習カード，筆記用具

(3) 展開

	学習内容・活動	指導上の留意点（○：指導　◆：評価）
導入 8分	1　集合，挨拶，健康状況の報告をする。 2　W-UPを行う ・ランニング，ストレッチ，補強運動 ・ボールキャッチ，ドリブル等	○元気よく挨拶させ，健康観察を行う。 慮しながら行わせる。 上げ，周囲を見ながらあいている場所へ移動することを意識させる。 ○膝を曲げてボールキャッチをさせ，止まり方やピボッ
展 35分	3　本時のねらいの確認をする。 **・ゴール前のあいている場所へ走り込み，仲間と連携して得点するゲームに向けた，自分の課題を見付けよう。** **4　ゲームを観察し，学習カードの観点に沿って仲間の動きを記録し合う。** ○ゲーム2（3対3）×2回 ○観察者の役割 ・一対一で仲間の動きの観察と記録 ・ボールを持っているときの動きとボールを持っていないときの動きについての観察と記録（学習カード） **5　ゲームでの動きの状況（学習カード）と，仲間との意見交換から，各自の課題を見付ける。** ＊思考・判断の学習＊ ○学習カードを基に観察者と意見交換 ○記録の状況やプレイ中の実感を基に，各自の課題を見付け，カードへ記入 **6　各自の課題を踏まえ，仲間と連携した動きで得点するための練習を行う。** ○課題の記入できたチームから，練習へ ○これまで取組んだ練習をもとに練習	る。 ○ゲームは，3対3（4対4）で行わせ，これまでに学習してきたボール操作や空間に走り込むなどの動きを使って攻撃させる。記録をしやすいように，攻撃が1回終わるごとにゲームを止め，攻守交代をさせる。 ○ゲームは男女に分けて行わせる。ゲームと観察を交互に行わせる。 ○チーム内でペアをつくり，お互いの動きを観察して学習カードに記録させる。 ○学習カードの記録から個人の動きを分析させ，自分ができていない動きを把握させる。 ○学習カードに自己の課題となることを記述させる。 ◆自己の課題を見付けている。　【思①】 「努力を要すると判断される生徒」状況（C）への手立て △記録を見て，丸がついていない項目を確認させる。 ール前へ走り込んでパスをする等の携した動きを練習させる。始めのゲームで得点につながらなかった攻撃（個人の課題となるところ）を踏まえて行わせる。 ○ボールを持っているときに課題がある場合には，ピボットをすることを意識させ，周囲を見てパスを出させる。ボールを持っていないときに課題がある場合には，あいているゴールを見付けて走ること，マークをかわすための動きをすることを意識させる。
まとめ 7分	7　整理運動を行う。 **2　本時のねらいに対するまとめを発表する。** **「○○さん，見付けた課題を発表してください。理由も添えて説明ね。」** 「私の課題は…です。理由は…だからです。」 **「（○○さんへのコメント）他の人は，学習カードにコメントしますね。」** 9　挨拶し，片付けを行う。	○使った部位を意識して整理運動を行わせる。 ○学習カードに次回のゲームで自分が気を付けることを記述させる。その際，自分の課題となるところをチーム練習での動きを踏まえて記述させる。 ○数名の生徒に，記述した内容を発表させる。 ○[illegible]て片付けを行わせる。

ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防を展開する。

ゲーム像の明確化が重要！何に対する課題なのか？

課題を見つけるための情報収集

記録の状況と意見交換による情報分析

この時間のねらいは？指導と評価の一体化

●よい授業とは何か

①指導のねらいや学習する内容が明確で，具体的であること

②生徒の実態，学習経験や技能の程度等に合った指導内容，学習課題を提示すること。特に，「できた」と実感できるような運動課題の提示は重要

③生徒あるいは生徒たちの意思決定を保障した時間を確保すること。

④仲間との関わりを豊かに，友達とどうやって良好な関係を築きながら学習していくかということ。

⑤技能，態度，知識，思考・判断，これらをバランスよく指導できること

現場の先生方にとっては，実践そのものが研究になっていくので，指導と評価を一体化していただくことが重要。一生懸命教えていただいた内容が，技能，態度，知識，思考・判断それぞれの観点から見たときに，本当にどこまで身に付いているのか，どの程度身に付いたのかなということ，観点別の学習状況調査をしっかり進めていただくこと，着実にそれを積み重ねていただくことが，よい授業に繋がる１つの方途であるのではないか。

●全国調査の分析からみた「よい授業」

全国の学力・学習状況調査では，見通しを持つ活動とか，振り返りの学習活動をしっかりやっている学校の生徒は，応用問題の出来が良かったよという結果がある。

冒頭で目標を示す活動，授業の最後で学習したことを振り返る活動を行っている学校において，国語Ｂの記述式問題の平均正答率が高い傾向が見られる。全教科にかかわる基本的な内容で，体育においても非常に重要だと思う。

●体力・運動能力調査の結果から，良い授業を考える

全国体力・運動能力，運動習慣等調査で，「もっと運動やスポーツをするようになるには？」という問いに対して，「好き・出来そうな種目があれば」，「友達と一緒に出来たら」，「自分のペースで運動やスポーツが出来たら」，「自由な時間があれば」が上位に挙がったという結果が出ている。

それは，好きなのをただ提供するのではなく，面白そうとか，これなら出来そうだというように教材化して提供しているかということではないか。子供たちの実態に合わせて高さを変えたり，インターバルを変えたりすること。サッカーのルールで，広いコート全部使って，ボール一個で「はい，サッカー楽しもう」という授業を推進するわけではない。

「得意，苦手，好き，嫌い」改善の視点のところだけ，男女とも中学校期で運動やスポーツが得意と思う割合が低くなっている。ただし，生徒たちは運動やスポーツが苦手だと思っても，運動やスポーツが嫌いとは必ずしも結びついていないという結果も出ている。このことから，運動やスポーツに対する好意的な感情を維持しつつ，生徒たちが出来たと実感するような指導方法等の工夫が求められている。「出来た，先生見て」という感動体験は，中学生でも重要なのではないだろうか。そういうようなものをどうやったら子どもたちが体育の授業の中で，手を叩いて喜んでいるだとか，手を取り合ってキャーキャー言っているという場面を作れるかは，とても重要だろうと思う。

●学習指導要領からみた授業づくりの工夫

学習指導要領や解説では，スポーツを素材として挙げるのではなく，学習課題が追究し易いようにプレーヤーの人数，コートの広さ，用具，プレー上の制限を工夫したゲームを取り入れて下さいと示されている。球技では，ボールの操作とボールを持たないときの動きに注目させて学習に取り組むことが大切であるとある。

中学校１・２年生には，５対５のバスケットをやれとはどこにも書かれていない。すなわち，運動素材やスポーツ素材をそのまま提供してくださいとはどこにも書いていない。どうやって教材化するかということが非常に重要だということである。

それから，技能，態度，知識，思考・判断，バランスよく指導できる単元計画の検討というようなものが必要だろうと思う。思考・判断だとか，態度の学習をしっかり充実させていくと，どうしても時間かかるが，中学校・高校で，計画の立て方を少し検討していただいて，一つ一つの単元にかける時間をもう少し長くしていくことは，考え

られるのかなと思っている。

最後に，指導と評価の一体化ということで，いったい子ども達に何が身に付いたのか，この視点を大切にして日々の授業を行うことが大切だと思う。

３．大学研究者からみた「よい授業」

大友　智　立命館大学スポーツ健康科学部

●社会の期待に応える授業実践

長崎県と大阪府茨城市で，学習指導要領の例示に示された指導内容をいつ教えるべきかを調査した表である。

ボール操作	小教員 N=85			
パス関連	小4まで	中2まで	高3まで	分からない
③方向を決めてパスをする	93%	7%	0%	0%
①得点しやすい味方へのパス	47%	51%	1%	1%
④フリーの味方へのパス	64%	34%	2%	0%
②味方が作り出した空間にパス	7%	71%	21%	1%
⑩味方が操作しやすいパス	35%	53%	11%	1%

ボール操作	中学校教員 N=12			
パス関連	小4まで	中2まで	高3まで	分からない
③方向を決めてパスをする	92%	8%	0%	0%
①得点しやすい味方へのパス	17%	75%	8%	0%
④フリーの味方へのパス	17%	75%	8%	0%
②味方が作り出した空間にパス	0%	42%	58%	0%
⑩味方が操作しやすいパス	17%	67%	17%	0%

小学校の先生方に対して行った結果では，「方向を決めてパスをする」というのは，小学校４年生までに教えるべきだと思っておられる先生は93％である。表の黄色い箇所は，この時期に教えてねと，学習指導要領や解説が設定している時期を示している。そこからみると，93％の方が，要領に設定されている時期と同時期に指導すべきと考えている。

次に，「得点しやすい味方へのパス」は，小５～中２で教えるように設定されているが，その時期の回答は50％位で，小４までに教えるべきという回答が47％もみられた。回答者の多くが早い時期での指導が必要と考えている。

「フリーの味方へのパス」では，中２までが34％である。赤で塗っている箇所は，回答数の多い所を示している。68％の先生が，早く教えるべきと考えている。これは，学習指導要領解説に示された時期より早い。早めに教えたほうがいいよという先生方の数は，「味方が作り出した空間にパス」が赤71％，「味方が操作しやすいパス」は足したら90％ぐらいと，早く教えようと考えている。

●子どもたちにとってのスポーツ

私の解釈で言うと，年齢よりも難しい内容を授業で指導されているのかな，という印象である。子どもにとって，難しいことを「さあ，やろう。」と授業で言われている感じになっている。子どもたちの言葉でいえば，「私たち，スポーツはやってもできないね。」，「先生たちは教えてくれるんだけど，先生はこれを教えようと思ってやっているんだけれど，私たちにとって難しいなあ。」，「教えてもらっても，やっぱりできないなあ。」「スポーツってやっぱり，特別な人がするものだよね。」と，感じてしまうのではないかと思う。

別の調査で「あなたは，運動が上手になりたいですか。」という問いに対して，運動が好きな子は，ほぼ100％上手くなりたいと思っている。次に，運動が好きでもなく嫌いでもなく普通に思っている子ども，このような子どもも90％がうまくなりたいと思っている。運動・体育嫌いな子，このような子どもたちも70％程度はうまくなりたいと思っている。つまり，子どもたちは，好き嫌いに限らずおおよそ，うまくなりたいと思っている傾向がみられる。

しかしながら，スポーツは特別な人がやるものだね，と思っている子どもたちが存在する。その子たちがオリンピックとか見た時に，どう思うの

だろうかと考えてみると，「すごいよね，すごいけど，あんなこと私ができる訳ないよね。」って思うのではないか？「スポーツ塾に，わざわざお金を払ってやっている。俺たちそんなスポーツ塾なんて行かないし。」，「スポーツは，土・日，夏休みも，朝から晩までやっていてすごい。けど，私はやらなくていい。」，「小学校の県大会（これ全部じゃないが）は，先生に選ばれた数名のうまい子だけがやっているね。」と思う，これ子どもさんたちは，「する」っていうスポーツからどんどん逃避していくのではないかと思ってしまう。スポーツは特別なものじゃないかと感じてしまうのではないかと危惧する。

スポーツイベントは，「特別な人がするものだから，私たちが「支える」必要を感じない，特別な人が特別にやっているのだから。」このように思うのではないか。

「私，そんな特別な人じゃない，そんな人間がなぜ，スポーツを支えないとだめなのかな。」，「スポーツ関連産業が（子供たちはこのような言葉を使わないですが），ものすごく発達しているからその人たちが支えればいいんじゃないかな。」このように「支える」スポーツの崩壊を起こすのではないかと心配している。

スポーツイベントについては，「スポーツはねぇ，特別な人がするもんだからショーみたいだよね。見ていると面白いよね。」全くオーディエンス，聴衆である。見るスポーツの面白さは高まるかもしれない。けれども，ＴＶのスポーツで「あの人イケメンと思うけど，何がうまいかわからないよね。」知るスポーツへの興味関心が，低下するのではないか。スポーツは特別な人がするもんだよねって，スポーツからの逃避が起こり，支えるスポーツの崩壊が起こり，「見るスポーツは面白い。」ので，テレビの前で座っている。そして，知るスポーツへの興味関心の低下が起こるのではないか。我々は，子どもたちがこのようにスポーツを捉えることを崩したい。これを崩すためにはどうしたらよいのだろうか。

●子どもたちとスポーツをつなぐために

子どもたちがスポーツを身近に感じ，スポーツとつながっていくためには，最初に述べたように，子どもたちの発達に応じた指導内容を設定していくことが大事だと思う。それでは，子どもたちの発達に応じた指導内容が設定されているのだろうか。実は，文部科学省が出している学習指導要領の解説では，そんなに高いことを設定していない。そのようなことをもう一度確認する必要がある。そして，全ての子どもが，特に能力の低い子どもが学習成果を確認する方法を開発したり，工夫したりすること。このようなアイディアは，いっぱい出ているので，それを確認していくこと，このことも必要ではないか。

全ての教員が，学習効果を高める指導方法を獲得し，実践することが必要である。獲得だけでは駄目で，実際に先生方が授業で実践することが必要だと思う。

私が述べたいことは，社会の期待に応える授業実践を行うということ，「期待された体育」，「ねらいを定めた実践」，「基礎的知識を踏まえた体育」を実践ほしいと願っている。体育は，社会から期待されている。

●まとめ

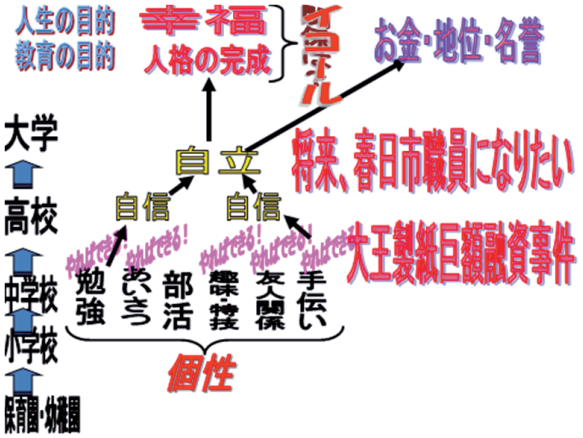
21世紀型の能力が，国立教育政策研究所から提案されている。これは，思考力を中心として，今後の学校教育が動いていくだろうということを示している。体育の授業では，思考力，実践力を獲得できるということをエビデンスを示しながら，提案していく必要があると思っている。

４．学校現場実践者からみた良い授業とは

下野六太　福岡県春日南中学校　主幹教諭

●教育の目的とは

人生の目的は，と問われたら，多くの方が「幸福になること」と言われるだろうと思う。教育の目的は「人格の完成」である。なぜ，人生の目的が幸福なのに教育の目的が幸福ではないのかとい



うところが分からなかった。この違いが分らなくて，ずっと苦しんで，30代半ばになってやっと気付いた。ここから自分の教育観，体育授業をつくる自分の立場，子供たちをどこに導いていけばいいのかということが開けていくような感じがした。

子どもたちは，保育園，幼稚園，小学校から中学校，高校に進んで行くが，私の職場である中学校で言うと，勉強，挨拶，部活，趣味，特技，友人関係，手伝いの中でもいろんな場面で，これでもかって言うくらい「やればできる」というシャワーを浴びせる，これが私は大事なのではないかなと思っている。

家庭教育も，学校・社会教育も含めてこれでもか，これでもかっていうくらい「やればできる」のシャワーを浴びせていってちょうど良いと思う。

保護者（母親）と子ども（中３）の三者面談の際に，私が，「将来何になりたいのか」と聞くと，隣のお母さんが「先生，春日市の職員にさせたいと思っています。」とお母さんが平気で答える場面があった。私は，もう一回本人に聞きました。「どうしてなりたいの」と聞くと，また，お母さんが「そりゃあ先生，地位が安定してますから。お金もある程度もらえますからね。」と回答した。私は，次のような回答を期待した「ぼくは，春日市で生まれて育った。春日市は九州で一番人口密度が高い，そういう町ではあるけれど，この春日市が好きだ。だから春日市のために一生をかけて働きたい。春日市をもっともっといい町にしたい。だから春日市の職員になりたい」しかしながら，本人がそのように考える指導は，家庭も学校もなかなかしていない。

体育科教育も本当に立ち返って子どもたちを人格者にするために，体育科教育を考えていく必要があると考える。

●実際の授業づくりでは

そういった考えのもとで私は，「よい授業」を目指す際に，工夫していることについての５項目について述べたい。

毎時間の学習で，授業で私が一番大事なのは，指導と評価の一体化だと思う。結局，運動嫌いの子どもたちにとって何を評価されるのかということが，単元の最初の時点で何も示されずに最後まで単元が流れていって，ある日突然先生が「今日はテストをするよ。」で，そのテストは，「こうこうだから・・・。」と言われた時に子どもたちは愕然する。当然，そのスキルも身に付いていない。みんなの前で自分ができてないことが，さらけ出される。これが問題だと思う。本校の体育科３人は，指導と評価を一体化させるということで一致している。

●ビフォアーアフタービデオから

ビフォアーアフタービデオの制作については，子どもたちに達成感を味わわせるということと，自尊感情を高めなければならない，「やればできる」ということを体育の学習で何をもって私たちは教えることができるかということを考えている中で，毎回導入している。

●単元構成の工夫と実際の授業における成果の紹介

水泳で５ｍしか泳げない子供がいる。５ｍしか泳げないとは，壁をけって１回もかけずに，１回の息継ぎもできずに何かやろうとして足が着いたのが５ｍということである。このレベルは体育の学習において非常に改善は難しい。そういう子ど

もたちも含めて単元構成の工夫が大切である。

クロールの指導を例に挙げると，最初からフォームの改善には着手しない。「泳げる」ようにして，そして，フォームの改善に着手すると「できる」ようになるというようなことが現場でわかっている。始業５分前から授業を開始するということとか視聴覚機器も導入している。

１年間，１シーズンの水泳の授業の最初と最後の映像。これが水泳の授業１年生の第１時間目である。（溺れながら泳いでいるような映像を見せながら）このレベルの子どもに，息継ぎがどうだとか手のかきがどうだとか言っても，なかなかやっぱり子どもに改善は見られない。

これが１シーズンの最後500m泳げるようになった子どもである。この子にはまず，500m泳げるようにする。中学校１年生の水泳授業で大半時間をかけて，フォームの改善に臨んだ時間はだいたい３時間ぐらいである。だから，泳げるようになったら余裕を持って先生の言うことを聞くことができるということ。

（次の子どものクロールビフォアービデオ）

この子はビフォアーアフターの段階でも非常に上手い方でした。１年生の段階で学年の約８割の子どもが１シーズンで500m泳げるようになっている。（一度もかけず，一度も息継ぎができず，５mしか泳げない子どもの映像がながれている）この子。この子だけカメラが寄っているのがわかるか？来なかった，12.5mの所まで。一度もかけない，一度も息継ぎができないで，足を着いたところが５m。

この子に私は，中学校卒業するまでに1000m泳げるというふうに言ったら，いや絶対信じない。１年生の終わりには５mから75mまで泳げるようになった。（次の子どもの映像を見ながら）

この子は２年生の映像がある。この子は１年生の終わりには75mだったのが，２年生の夏休みには1300m泳げるようになった。まだフォームの改善の余地は残っているが，彼なりのフォームで，ゆっくりとではあるが，泳ぐことができるようになっている。彼が1000mにゴールする時に，私は手を差し出したが，私の手をかいくぐって，もう一回ターンして行った。一瞬，「ちょっと嫌われているのかな」と思ったが，「本人が1000mを数え間違えているのかも？」と思って戻ってきたときに，もう一回手を差し出したら，もう一回手をかいくぐった。その時に「これは意図を持って泳いでいるな」と思い，黙って待っていたら1300m泳いだ。「何で？」って聞いたら，「泳げるのが嬉しくてやめるのが嫌だった」ということだった。（がむしゃらにバタ足を頑張って泳いで８m泳いだ子をさして）この子なんかでも小学校から，バタ足を頑張れという指導をされているのでこんな風な泳ぎになる。全然泳げなかったこの子も500m泳ぐことができた。体は小さいが大きなパワーを持って泳ぐことができるようになっている。

（次の子どもの映像を見ながら）

最後，この子を見ていただきたい。右に左に息継ぎをしていたこの子が，ワンシーズンでこのフォームに変わっている。（別人のようなフォームになっている映像が流れている）カメラが止まらないのは，「３分の２までいったら止まっていいよ」と言ってるのだが，「この子，こんなにうまかったっけ」と私がとまどってしまうくらいの泳ぎだった。ビデオカメラが回り続けているのは，私が，本人かどうか確認しているためである。

以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

５．発表に関しての補足及び会場参加者との質疑応答から

●授業における態度形成について

【徳永】

体育授業の中でどう子ども相互の人間関係を作っていくのかという非常に大きな問題があると思うが，そのことについて先生方はどのような考えで，実践されたか聞かせてほしい。

【石川】

態度の内容はかなり具体的に仲間の学習を援助するとか助言をするとかそういうことで学習指導要領に書かれていて，基本的に一人で何かをやるというより，やっぱり授業の中で仲間とかかわりながらやっていくことの方が効率的である。それを意図的，計画的にやりましょうということが重要。特にスポーツを将来的に楽しんでいくためには，仲間と良い関係をつくりながらやることが自分自身の技能を高めることにつながるし，仲間の技能を高めることにもつながる。そういう風にやった方が楽しいよねと言うことを発達の段階に応じて順次，教えていくことが必要。自然に身につくということはない。小学校の低学年のころから低学年に必要な，そして低学年の子どもたちがわかる内容で教えていくということが大事。

【大友】

仲間関係とか相互関係とか簡単に自動的に育っていくものでもない。身体的有能感・統制感・受容感といったものを高めていくような具体的な手だてをその学年に応じてやっていく。だれだれがやってきたことを認め合う，この子は○○だねっていうことを先生がきちんと提示してあげるということを必要欠くべからざるのかなと思う。

【下野】

実際の授業では，共同学習のひとつの形として，スモールティーチャー＝ST，ST 学習を用いている。水泳のバタフライを習得していった例で説明すると，クロールが1000m 泳げて平泳ぎが1000m泳げている集団に，バタフライを教える。最初は一斉指導で教えていきながら，うまくなりそうな子を私が中心に教える。そして，ある程度うまくなった生徒を教師役にして子どもたちに選択をさせる。グルーピングが出来上がる時に，日頃から意地悪な子とか，からかう子とか悪口を言う子のところにはほとんど人が並ばない。人格が優れて優しくて思いやりにあふれている子のところにはワーッと並ぶ。Aの子が増えたら，その子が ST になる。教える側になる。だんだん教える側が増えていって，教えられる側が減っていくというような仕組みになっている。最後の方は３人で，２人で一人を教えるとか，３人で一人を教えるというような形になっていく。そうやって全員がうまくなっていくような仕掛けの中で，「あっ自分がうまくなったのは●●君のおかげだ」というような形で感謝の言葉が飛び交うような形になっている。

【石川】

中学２年生の女子が保健体育の授業が楽しいと変化するきっかけに友達に認めてもらえるというのがあるが，授業の中に安心感が必要ではないかと思う。特に女子の場合は，必要で，安心して授業が受けられる。先生みたいなカリスマ教員は子どもたちの心の動きに敏感で，良いこと，悪いことはっきりさせながら，この先生と授業をやっていけばうまくなるかもしれないとか，この先生と一緒にやっていけば自分はあんまり運動が出来ないけども，安心してやっていける，そういう感覚を授業の中に作り出していくというのは非常に大切ではないかと思う。そこの部分は態度の学習をしっかりやる，そこのところを求められるのではないかと思う。

●能力の高い生徒への指導について

【本多】

大友先生に出来る子へのアプローチをどのようにお考えなのかを質問したい。

【大友】

難しい課題である。挑戦を与えたり，設定したり，そういうことでその人たちが，技能を高めることが出来る，教える，班の中で相互学習をやる，リーダーになっていく，そういった格好のものかなあと思う。

【下野】

私はできる子には厳しい。出来る子が自分さえよければと言う考えを持っている子には真っ向から厳しい。出来ない子を救って初めて出来るというふうに言えるのではないかと思っているの

で，最初に示したように，人格者に向かっていく手段として体育の教科があるのではないのかなあと思って，一つの訓練の場だと思ってとらえている。

【石川】

出来る子のモチベーションについて。末永専門官の調査の報告書の結果によると，もっと運動やスポーツをするようになるには，その条件の中に，運動をたくさんする，運動が好きといっている子たちは，いわゆる一流スポーツ選手に教えてもらえればもっと運動するという結果が出ている。これは運動が苦手，嫌い，あまり運動しない子たちには出てこない。はっきりそこに差が出てきているように思う。そのことから考えると，やっぱり能力の高い子たちはあこがれとなるようなものを見る目があったり，自分はああなりたいというものがある。そうすると，その子に応じた達成課題としてやりがいのある様な課題をどうやって与えてあげられるかと言うことは一つ条件には成るのではないか。

もう一つは下野先生の実践から考えてみると，この子の有能感，教えてあげられるんだとか，自分が役に立つんだと言うことを持ってくれるのではと思う。優越感ではなくて，有能感。そういうことが教育的にきちんとその子たちを分かってもらえて，授業の中でみんなで上手になろうとすることで，自分が貢献できたという実感が持てたとしたら，子どもたちは授業に対してやりがいを持てたと言うことは出てくるのではないかと考える。

●よい授業とは（まとめ）

【石川】

それぞれの立場でどうかかわるかによって良い授業の条件は変わってくると思う。それがこういった形でいろいろと情報交換できて，それを使えると言う状況になればいい。現場でやっていた自分のことを考えると，たぶん自分はいいとこ取りだったと思う。何の思想もなくいつも思っていたのは，子どものためになにがいいのか，この子どもたちのためにこれを使えばいいのか，誰かに聞いてみたり，そういう情報をいっぱい集めることが大事なのだろうと思ってきた。今の先生たちを支えるような情報提供をしていただけるということを期待していると言うことである。

【大友】

良い授業を考えると言うことで，私が思っていることは体育に関わっては教育学的な要請がある，適切な成長発達を促していますか，これをかなえるのが良い体育の授業であると思う。それからスポーツ科学は相当たる勢いで新しい知見を提供している。そのことについて子どもさんたちに提供できているだろうか。もう一つは社会的，時代的要請があると思う。これは明らかに次の時代，21世紀型を看取った授業のあり方，具体的エビデンスが，こういうネットワークの一つの大きな使命ではないのかと思う。

【下野】

子どもたちが意欲を最後まで持ち続けることが出来るかどうかが，よい授業に関わっているのではないのと思う。そういう意味では指導と評価の一体化の中で，気をつけているのはＢ評価の間口をちょっと広げるというか，ちょっと頑張ればＢはとれるんじゃないかという思えるぐらいの位置にＢ評価を位置づける。そしてＢを取れた子どもたちに激励をしていきながらＡを目指そう，Ａを取れた子どもたちにはＡＡを目指していこうという形で技能面を中心にした指導をしてるが，子どもたちをそのためにみんなで協力しようと，みんなでうまくなっていくのが体育の学習なんだって言うことを子どもたちにはしっかり伝えている。

【佐藤】

今日は，良い授業の一つの話題から，技能だけではなく，態度形成に資する体育学習が論じられてきたと思う。しかし，態度の形成に特化すると，体育の授業ではなく，道徳の授業になってしまう。体育が教材となり，人間形成のツールになってしまうと体育の固有性がなくなってしまうの

で，そのバランスはきわめて難しいとも言える。

内発的・外発的動機付けのバランスを考えるとき，私は，コールバーグの発達理論を使いながら，外発的に動機づけられた態度のアプローチのみでは，我々指導者が起こしやすい事例として，部活の中では出来るけど，部活の外では出来ない例とかがあるわけである。その先にある腑に落ちて生徒自身が自ら大切にしようとする態度の形成をゴールとして考えていく必要があるだろうし，そこが技能，態度，知識，思考・判断のバランスを取りながら授業を仕組み，小学校，中学校，高校に適した学習経験を通じて，その結果として，社会に出たときに自発的なスポーツパーソンに育っていくのだろうなあと思う。最後に，大友先生の中からは見るスポーツ，聞いたスポーツになっていて，支えるスポーツの面が弱いとご指摘があった。是非，スポーツのゴールとしてはスポーツのする・見る・支えるという多様性を育てるために，小学校の時にどうしたらいいのか，中学校の時にどうしたらいいのか，高校の時にどうしたらいいのかということを継続的に本日の参加者とともに，今後も情報を共有しながら考えていけたらよいと思う。（了）

本シンポジウムは，2014平成24年３月８日（土）鹿児島大学において開催された「九州体育・保健体育ネットワーク研究会（鹿児島ファイナルラウンド）保健体育授業づくりシンポジウム」の概要を要約したものである。

なお，本シンポジウムの記録に際して，下記の方々の協力を得て作成した。

＜報告書作成協力者＞

名　　前	県　名	職　　名
清田　美紀	広　島	広島県教育委員会スポーツ振興課 指導主事
岩下さおり	鹿児島	鹿児島県教育庁体育保健課 指導主事
内田ひろみ	福　岡	福岡県体育研究所 長期研修員
阿部　尚史	大　分	大分県教育庁体育保健課 指導主事
岩田　雅子	熊　本	熊本県教育庁体育保健課 指導主事
岩永　智子	佐　賀	佐賀大学附属中学校 教諭
永渕　　武	佐　賀	佐賀県教育庁学校教育課 指導主事
福井　宏和	佐　賀	伊万里市立伊万里中学校 教頭

※職名は，平成25年度末現在